

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山国際大学 現代社会学部
- ・所属ゼミ 川本ゼミ（住環境デザイン研究室）
- ・指導教員 川本聖一
- ・代表学生 浅井 莉恵
- ・参加学生 浅井 莉恵、上 絢音、竹島 知希、日又 嵩人、孫 家桐、王 松傑、須藤 真人、竹林 和輝、藤田 美香

【研究題目】 地域の人々とともに進める空家リノベーション

1. 課題解決策の要約

実際に行う空家のリノベーションを、「カーサ小院瀬見」に協力して学生主体で行っていく。学生は、地域活性化のためどのような提案を行えばよいかを検討し、実際の建物をリノベーションしていく。当面の活動は以下である。

- ・ 空家へ移住してきた住民の生活スタイルに関する事例研究。
- ・ 「カーサ小院瀬見」の活動の調査と整理を行い、今後の地域活性化を検討する。
- ・ 空家（「カーサ天神町」、グループリーダー所有の物件）リノベーション計画と実践。

「カーサ小院瀬見」は、南砺市の南西に位置する小院瀬見という限界集落の所在する循環型農村の構築や地区の活性化を目指して活動しているグループである。グループのリーダーは南砺市福光町周辺にいくつかの空家を所有しており、その空家を地域の活性化のために役立てようとしている。

上記の活動を通して、学生は地域活性化に関わる問題解決能力を養うとともに、若い学生が主体的に地域の取り組みに関わることによって、地域の問題解決の促進を目論む。



図1 南砺市福光のリノベーション物件

2. 調査研究の目的

本フィールドワークは、成果として直接的に学生の卒業研究の題材となり、成果として卒業研究としてまとめられていく予定である。その研究過程においては、学生への教育効果として、下記の

ような特徴がある。

- ・ 実行する学生は、地域において住宅関連企業に進むものが多い。業界の最新知識を直接取得する機会となる。
- ・ 関連企業の第一線で活躍する方の意見をヒアリングすることにより、企業活動の臨場感のある調査が可能になる。また、コミュニケーション能力を養うことができる。
- ・ 学生が、現状の地域特性が今後どのように変化していくかを考える機会となる。また発想した考えが、どうすれば新しいビジネスにつなげていくことができるかを実践的に考える場を提供する。
- ・ 地域を実践フィールドとして、大学として地域再生に取り組む研究活動は、地域を理解し地域に役立つ人材を育成する直接的効果がある。これにより地域に根差した教育機関としての役割を果たせる。
- ・ この活動をとおして、一緒に活動したグループに対して、研究成果を提供することにより地域の発展のために寄与することができる。また、協力していただいたグループもそれを期待している。

地域住民と学生の活動の関係性は上述のようであるが、この関係性の特性を生かして、地域活性化に協力していくことを目的とする。

3. 調査研究の内容

① 空家の実態調査

実証研究の対象となる空家に関し、現地に赴き、敷地の形状と大きさと高低差、接道の状況、建物の形状と大きさ、建物の傷み具合など建物に関する情報を整理した。土地建物の登記簿を入手し、建物の建築年、登記簿上の面積や所有者を確認した。また固定資産税課税明細を入手し、土地建物の面積と所有者を再確認した。

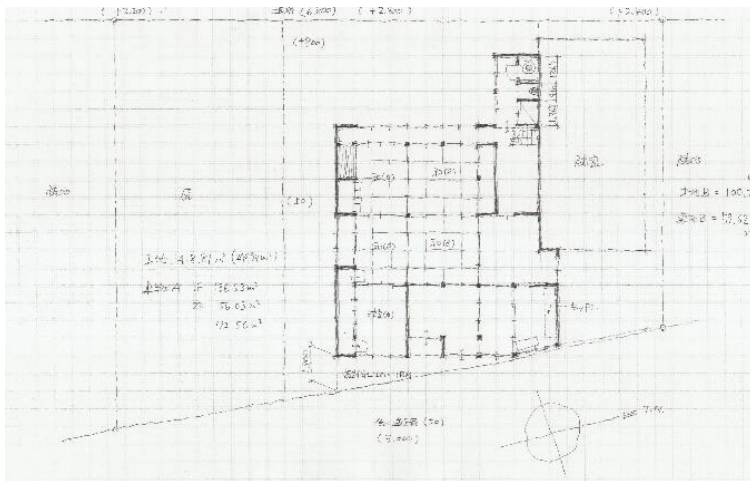


図2 学生による土地建物の実測



図3 学生による道路高低差の実測

② 「カーサ小院瀬見」の要望

学生は何度も、「カーサ小院瀬見」との打ち合わせを行い、リノベーションの方向性、リノベーションの部位、工事工程などを決めた。2階をゲストハウス、1階を福光で行われていた麻布づくりを復興させてそれを見学できるギャラリーとして整備する方向となった。また、福光町の人口・世帯の状況、福光町における麻布づくりの歴史についても調べることとなった。

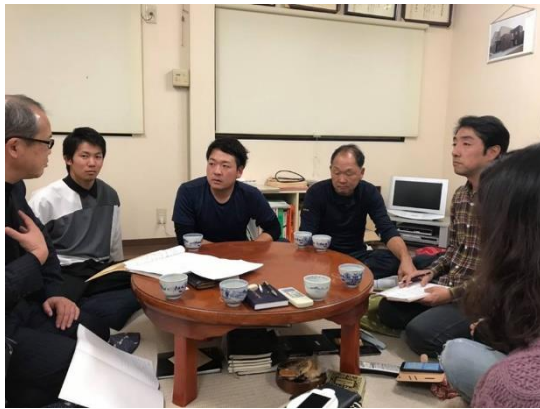


図4 学生とカーサとの打ち合わせ

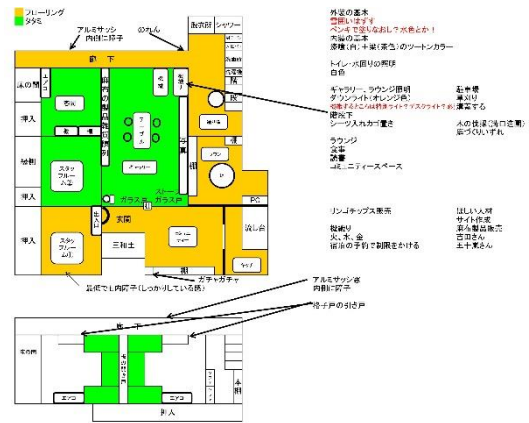


図5 カーサからの要望のまとめ

③ リノベーション実施に向けてのヒアリング

リノベーションの方向性が決まったので、住宅をゲストハウスとギャラリーに用途変更するため、それが可能であるか、もしくはどのような設備が必要となるかを南砺市建築センター及び、保健センターへ学生はヒアリングを行った。建築センターでのヒアリングでは、建物の所有形態、築年数、面積を鑑み専門のスタッフからアドバイスもらった。建築基準法が改定になり、2019年6月から、200㎡未満の用途変更であれば、確認申請が不要になるとの情報ももらい、ゲストハウスのオープンには2019年6月以降とし、確認申請は申請しない方針で行うことが決定された。保健センターでのヒアリングでは、トイレや洗面所の個数など細かい規定の指導があり、それを盛り込んだ計画にすることとなった。また、確認申請が不要であるため、準備のための解体、変更工事は先行して行うことができる確認をとった。



図6 南砺市保健センターでのヒアリング

④ 地域活性化のためのワークショップ

前述したように、「カーサ小院瀬見」は、南砺市の南西に位置する小院瀬見という限界集落の所在する循環型農村の構築や地区の活性化を目指して活動しているグループである。地元根差した店舗を営むことや、無農薬農業を通して、地域活性化を行っている人がいる。今回の空家リノベーションが、そんな活動の中で、どのように位置づけられ、関係性を持っているのかを、メンバーの人々とワークショップ形式で議論した。



図7 カーサメンバーとのワークショップ

⑤ 工事開始

カーサとの打ち合わせでリノベーションの方向性も決まり、建築センターや保健センターのヒアリングにより、その方向性の実現可能性も見えてきたので、まだ不確定要素もあるが、できる工事から行うことにし、学生が主体になり、プロの職人さんの指導を受けながら工事がスタートした。まずは、床の張替え工事、階段のかけなおし工事、外周りの補修工事などから進めることにした。また、ギャラリーに展示する「はたおり機」の制作に取り掛かった。



図8 床の張替え工事と外部の補修



図9 はたおり機の試作

⑥ 工事は継続し、オープンに向けて準備

本報告は工事が始まった状態での報告となった。工事やオープンのための準備は、今後継続して、2019年9月のオープンを目指して進行してゆく。

4. 調査研究の成果

① ゲストハウスとギャラリーへのプロジェクトの決定

カーサとしては、福光町に多く存在する空家の1つを利用することによって、ゲストハウスをつくり、活動して

いる取り組みを多くの人に知ってもらいたい。ゲストハウスを訪れて、福光町の商店街を実際にみて、その魅力をもっと知ってもらいたいという思いがあった。また、ギャラリーを併設することによって、訪問者が気軽に交流できる場所を作りたいという思いがあった。



図 10 ゲストハウス構想の理念

学生は、これらの思いを受け、「3. 調査研究の内容」で示したように、空家の実態調査、何度ものカーサとの打ち合わせ、関係諸官庁との打ち合わせ、カーサメンバー全体とのワークショップを経て、基本計画を完成させた。これに基づき工事がスタートしている。引き続き、工事とゲストハウス運営に向けて準備は進む状況である。



図 11 決定した基本計画

② 福光町に関する調査

表 1 人口構成

	年少人口			生産年齢人口			老年人口		
	2000年	2015年	2030年	2000年	2015年	2030年	2000年	2015年	2030年
福光町	2,799	2,119	1,531	12,460	9,471	7,524	5,128	5,955	5,295

	年齢別人口割合(%)								
	年少人口割合			生産年齢人口割合			老年人口割合		
	2000年	2015年	2030年	2000年	2015年	2030年	2000年	2015年	2030年
16421 福光町	13.7	12.1	10.7	61.1	54.0	52.4	25.2	33.9	36.9

1889年(明治22年)に町村制施行により砺波郡福光町設置されている。町名の由来は、この地に清水が噴出しており、「噴き満つる」が福光になったといわれる。特産品としては、干し柿や米菓がある。2004年の総人口は約2万人であった。2000年の国勢調査における産業人口は、第一次産業就業人口が737人、第二次産業就業人口が5188人、第三次産業就業人口が5196人であり、二次産業、三次産業従事者が同程度

で多い。一次産業従事者は少ない。富山県西礪波郡に属していたが、2004年11月1日に市町村合併によって南砺市となった。人口問題研究所のデータによると、表1のような人口動態である。本調査は手を付けた段階であるが、担当の学生は、福光町の世帯や空家の実態に関して、調査し自分の卒業論文に取り入れてゆく予定であり、これをまとめて、カーサに資料提供するとともに、完成するギャラリーで開示する予定である。

③ 麻布の歴史に関する調査

福光では、江戸時代以前より近郊の山間地で芋麻や大麻を栽培していた。麻布は、一般的には「あさふ」であり、福光では「あさぬの」と称している。古代、布と絹は別物「ぬの」は麻を指す。このことからこの地域では古くから布を織っていたようだ。「八講布」「五郎丸布」は、礪波地方で織られた布として特産物となっていた。「八講布」は、奈良時代、小矢部市八講太付近で織られていた布で、男子の和服の正装袴地として需要があった。「五郎丸布」は、小矢部市五郎丸で織られていた布で京都地方の神社仏閣の祭礼に張り巡らす幕地として需要があった。礪波地方の麻布は平安時代には宮中の御用布となっていた。昭和天皇の大喪の礼では装束に用いられる麻布は福光麻布が用いられた。弥生時代から続いた福光麻布は、その後麻の需要減が理由で平成12年「船岡商店」の閉店をもって2000年の歴史を終えた。担当の学生は、福光町の世帯や空家の実態に関して、調査し自分の卒業論文に取り入れてゆく予定であり、これをまとめて、カーサに資料提供するとともに、完成するギャラリーで開示する予定である。また、はたおりの技術を引きついでいる地元の方への「聞き書き」を予定している。



図12 あさぬの作りについてのおばあちゃんへのヒアリング

5. 調査研究に基づく提言

本フィールドワークはその研究過程においては、学生への教育効果としての特徴は、社会の最新の動向を知る機会となり、社会人とのコミュニケーションを行う良い機会となり、様々な問題解決をするときに、実務を通して考える機会となり、地域に役立つ人材教育の場となるなど、様々な利点がある。一方地域で地域活性化のために活動する人々は、若い人たちの発想と活動を期待している。学生の活動は、地域で活動するグループに対して、研究成果を提供することにより地域の発展のために寄与することができる。今までの活動を通して、大学の学生活動と地域活性化を目指すグループの協働は大変有効であることが実証できたと考える。

本報告書に述べたように、この取り組みは、計画が終了し、実行がスタートした段階である。今後、その地域とそのグループにふさわしい、古民家リノベーションの形態を事例研究として残してゆくとともに、学生主体で、ゲストハウス運営の提案、インバウンド誘致に生かせる外国語教育など、国際大学としてふさわしい活動を考えて行く。その結果を広く公表し、地域活動に生かしてもらいたい。

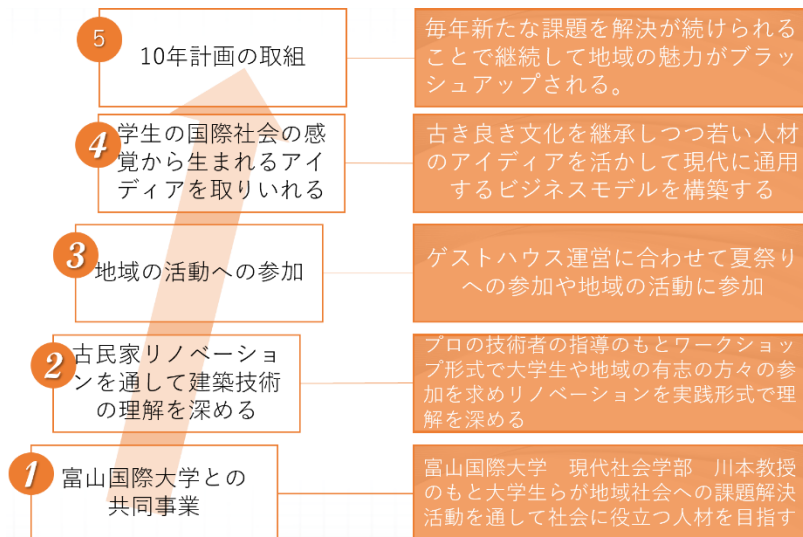


図 13 今後の富山国際大学と地域のグループの在り方

6. 課題解決策の自己評価

地域の人たちとの協働という観点で、大変有意義な活動ができた。今後の課題としては、有効な広報活動をいかにして行っていくかである。今回の「平成30年度学生による地域フィールドワーク研究助成事業 研究成果報告」もその1つとなるので期待している。今後はマスメディアを有効に活用しながら、取り組みをアピールし、地域の活性化に貢献していきたい。